

## VI 花 き

### 1. キク

きく科で、原産は中国である。

きくは本県で生産の最も代表的な花きである。日長反応を利用し、周年生産が行われている。きくは根が浅根性で、土壤中の酸素要求量も大きいため、排水性の良い、保水力のある肥沃な土壤が適し、排水不良・過湿にならないように物理性を改善する必要がある。また、極端なアルカリ性・酸性にならないように注意する。

土壤のpH(H<sub>2</sub>O)の適正範囲は施肥前で6.0～6.5程度であり、ECの適正範囲は0.3ms/cm程度である。肥料の吸収力が生育ステージによって、異なり定植後は少なめに、生育中期から開花期にかけては多肥を好み、窒素が不足すると花が小さく、開花も早くなり品質が落ちる傾向にある。

#### 1). きくの作型別施肥量

(kg/10a)

作 型	定植時期	施肥法	堆きゅう肥	N	P <sub>2</sub> O <sub>5</sub>	K <sub>2</sub> O	備 考(目標収量等)
電照きく	発蕾の76日 前	基肥	3,000	15	15	15	堆きゅう肥の性質を十分把握して肥料的利用と土壤改良的効果を使い分ける。
		追肥	—	10	10	10	
		計	3,000	25	25	25	
促 成 (夏きく)	1月上旬	基肥	3,000	20	20	20	
		追肥	—	5	5	5	
		計	3,000	25	25	20	
小 き く	4月中旬 ～ 6月中旬	基肥	2,000	20	25	20	
		追肥	—	0	0	0	
		計	3,000	20	25	20	
夏秋きく	4月上旬 ～ 6月上旬	基肥	3,000	15	30	15	
		追肥	—	5	0	5	
		計	3,000	20	30	20	
ｽﾌﾟﾚｰきく	8月上旬 ～ 3月上旬	基肥	2,000	10	10	10	
		追肥	—	5	5	5	
		計	2,000	15	15	15	

#### 2). 施肥管理上の注意

- ① 適正pH(H<sub>2</sub>O)は、6.0～6.5であるが土壤診断を行ってアルカリ資材(苦土石灰等)の投入量を決め、適正な肥培管理を行う。
- ② ｱﾙｷ栽培の場合は全量基肥とするが、きくの生育のためには基肥を2/3とし、定植1ヶ月後とさらに1ヶ月に追肥するのが望ましい。
- ③ 施設きくでは、2度切り栽培の後作は、第一回の整枝時を発蕾時の2回追肥をそれぞれ10a当りNで6～7kgを施用する。
- ④ 寒きくの追肥は定植後1ヶ月目、その後3週間おきに2回追肥する。
- ⑤ ｽﾌﾟﾚｰきくでは、追肥は摘心後3週間とする。
- ⑥ ｽﾌﾟﾚｰきくでは、一般の輪きくの施肥量の2/3を目安とするが、ｼｰﾄﾞ栽培では施肥量を20%減肥する。
- ⑦ 定植後は、十分な灌水を実施し、活着を促進し、初期生育を揃える。活着後は幾分控え目にし根を下方に張らせるようにする。
- ⑧ ｱﾙｷは適当な水分状態の時に実施する。
- ⑨ 秋きくﾀｲﾌﾟの12～4月出荷は、再電照を行う
- ⑩ 電照きくで2度切り栽培は、11～2月出荷の後株を利用して、3～6月に出荷する作型であり、定植作業が1回で済み省力的であるが栽培期間が8～9ヶ月と長期にわたるので、土づくりには特に注意が必要である。

## 2. カーネーション

ナデシコ科に属し、原産地は地中海で、好光性で長日植物と言える。

管理によっては、周年咲きの宿根草であり、栽培期間が長くなる。

土壌は有機質の多い肥沃な土壌に適し保肥力(CEC:30me程度)が大きく、しかも排水良好で通気性の良い土壌を好む。

あらかじめ1年前から培養土を準備、土壌：有機質は2：1の割合として風化させ、団粒化土壌をつくる。

土壌のpH(H<sub>2</sub>O)の適正範囲は6.0～5.0程度である。また、ECは0.3～0.8ms/cmと若干高く、生育初期から中期にかけて窒素の肥効を高め、葉内窒素含有率を5%以内とし、特にカリウムの過剰は植物体内のK/Ca比を増大し、切り花の品質を柔らかくする。

生育温度は15～25℃で、昼夜の温度較差が5～10℃が生育良く、品質も良い。

### 1). 施肥量

#### (1). 沿海地帯

(kg/10a)

作型	定植時期	施肥法	堆きゅう肥	N	P <sub>2</sub> O <sub>5</sub>	K <sub>2</sub> O	苦土石灰	熔 燐	備 考
平坦地 周年	6月下旬	基肥	3,000	20	40	20	80	60	追肥の時期は 9月、12月、3月 に行う
		追肥	—	15	10	15	—	—	
		追肥	—	15	5	15	—	—	
		追肥	—	20	5	20	—	—	
		計	3,000	70	60	70	80	60	

※この他、秋切り短期栽培、母の日一度切り、夏切りの各作型がある。

#### (2). 中山間地帯

(kg/10a)

作型	定植時期	施肥法	堆きゅう肥	N	P <sub>2</sub> O <sub>5</sub>	K <sub>2</sub> O	苦土石灰	熔 燐	備 考
夏秋切 り	3月上旬	基肥	2,000	30	35	26	80	60	追肥の時期は 一番花終了時 3月、8月、10月
		追肥	—	14	7	10	—	—	
		追肥	—	10	5	10	—	—	
		追肥	—	10	5	10	—	—	
		計	2,000	64	62	53	80	60	

### 2). 施肥管理上の注意

- ① 適正pH(H<sub>2</sub>O)は6.0～7.0を目標に、土壌診断を行ってアルカリ資材(苦土石灰等)の投入量を決定し、適正な肥培管理を行う。
- ② 適正なEC(1:5)は基肥施用前で0.3(mS/cm)程度、生育期は0.8～1.0(mS/cm)程度である。
- ③ バーク堆肥、ピートモス等の有機物を堆きゅう肥の2～3%施用する。
- ④ 基肥には微量要素を含んだ肥料を用い、生育前半は薄い液肥主体とする。
- ⑤ 追肥は9・12・3月に従い、液肥は随時施用する。
- ⑥ 窒素と加里は一定レベルにする。
- ⑦ 灌水は、晴天の場合1回に60cc/m<sup>2</sup>程度で、曇天が続く場合は少なくする。月によってその回数は異なる。(1～3日一回を加減する)

## 3. バラ

ばら科の木本性植物で、四季咲性である。原産地は東・西アジアである。

日光は最も重要な要素で収量・品質に大きな影響を与える。

土壌条件は、有効土層が深く(40～50cm以上)、保水性・通気性・保肥力のある土壌が適している。

生育気温は、15～20℃で冷涼な気候を好み高温では、病害の発生が多くなる。

土壌のpHは5.5～6.5程度が適している。また、ECは0.5～0.8(ms/cm)程度を目安とする。

ばらは永年作物であり年間を通して、好適な樹体の栄養条件と、土壌中の無機成分濃度の維持が

できるよう土壌診断、栄養診断を常に実施する。

1). 施肥量

(kg/10a)

作型	定植時期	施肥法	堆きゆう肥	N	P <sub>2</sub> O <sub>5</sub>	K <sub>2</sub> O	備考(目標収量等)
平坦地 (冬切り 栽培)		基肥	8,000	40	50	35	追肥は月1回程度行う。春～夏は有機質主体、秋～冬は化成肥料主体とする。ECは0.5～1.2の範囲を厳守し過剰施肥に注意
		追肥	-	20	10	20	
		計	8,000	60	60	55	

2). 施肥管理上の注意

- ① 適正pH(H<sub>2</sub>O)は5.5～6.5を目標に、土壌診断を行ってアルカリ資材(苦土石灰等)の投入量を決定し適正な肥培管理を行う。
- ② 堆きゆう肥、苦土石灰は定植3ヶ月前に施用し、全面深耕耕起する。
- ③ 適正EC(1:5)は0.5～0.8(mS/cm)とする。(火山灰土壌は0.5～1.2mS/cm)
- ④ 基肥は緩効性肥料を主体に定植の2～3週間前に施用し、追加は液肥を主体に化成肥料・骨粉・油粕をも施用する。なお、追肥は月1回程度とする。
- ⑤ 塩基バランスをはじめ土壌養分には十分注意を要する。このため、土壌診断を常に実施し、生育に注意が必要である。苦土石灰80kg/10a、熔燐60/10aを基肥に施用する。
- ⑥ 水管理に注意し、過湿・過乾にならないようにし、PF1.8程度が適当である。

4. ストック

アブラナ科であり、秋播き一年草であり、原産は南ヨーロッパである。

生育温度は、15°C程度で開花期は7～8°Cと比較的低温で良いが、これよりの低温は花の品質を低下させる。

土壌は排水の良いことが第一条件で排水不良条件下では、立ち枯れが多発し、生育も良くない。

土壌pHが低いと根の発達が悪くなり、マンガン過剰症が出やすく、地上部も貧弱になる。またpHが高くなり過ぎると、杓素欠乏症を生じ易くなる。有効土層が深く、有機物の豊富な地力の比較的高い土壌に適する。土壌病害には特に注意する。

比較的肥沃で保肥力の高い、有機物に富んだ土壌が適している。

1). 施肥量

(kg/10a)

作型	定植時期	施肥法	堆きゆう肥	N	P <sub>2</sub> O <sub>5</sub>	K <sub>2</sub> O	備考(目標収量等)
年内～春 出し栽培	8月中旬 ～ 12月中旬	基肥	2,000	15	20	17	栽培期間の長い作型ではこの基準より多めに施用基肥は平均に肥効が続くように緩効性肥料を利用する。
		追肥	-	5	-	8	
	計	2,000	20	20	25		

2). 施肥管理上の注意

- ① 適正pH(H<sub>2</sub>O)は6.0～6.5を目標に、土壌診断を行ってアルカリ資材(炭酸苦土石灰80kg/10a)と熔燐(60kg/10a)の投入を実施し、適正な肥培管理を行う。
- ② 適正EC(1:5)は0.5～1.0(mS/cm)を基準とする。
- ③ 生育前期は十分灌水を行い、蓄が肥大し始めたら茎葉の乱れを防ぐために土壌水分を少な目にする。
- ④ 基肥は緩効性肥料の使用が望ましく、緩効性肥料の場合は、定植の10日前までに全層に丁寧に施す。
- ⑤ 生育後半まで安定して加里成分を供給することが必要である。
- ⑥ 有毛種のノワグ-等は2割程度減肥する。

- ⑦ 追肥に液肥は有効である。
- ⑧ 作型が分枝系と無分枝系に分かれ、また出荷期が高冷地、中山間、暖地に区分される。

## 5. トルコギキョウ

リンドウ科に属し、北アメリカ中央部からメキシコ北部の原産である。半耐寒性の一・二年生草であり、生育適温は幼植物で15℃、生長後期でも20℃程度である。

土壌条件は、排水が良く(砂質・砂壤土)、有効土層の深い、通気性が良好で有機物の多い地力の高い土壌に適する。

土壌pH(H<sub>2</sub>O)は6.0~6.5が適する範囲で、ECは0.5ms/cm程度で生育が旺盛になる。

### 1). 作型

#### 暖地

夜冷育苗加温促成栽培……………定植：10月上旬及び10月下旬~11月上旬

普通育苗半促成栽培 ……………定植：12月上旬~1月中旬

#### 中山間

夜冷育苗加温促成栽培……………定植：9月中旬

7~8月出荷 ……………定植：3月下旬~4月上旬

8~9月出荷 ……………定植：5月上旬

10~11月出荷(高冷地)……………定植：5月下旬~6月上旬

### 2). 施肥量

(kg/10a)

作 型	定植時期	施肥法	堆きゅう肥	N	P <sub>2</sub> O <sub>5</sub>	K <sub>2</sub> O	備 考(目標収量等)
ハウス (促成栽培)	高冷地	基肥	3,000	15	15	10	初期生育を促し十分ホリユームを確保するため基肥重点とする。
	1月下旬 ~5月中旬	追肥	—	5	5	5	
	暖地	計	3,000	20	20	20	
	10月上旬 ~10月下旬						

### 3). 施肥管理上の注意

- ① 適正pH(H<sub>2</sub>O)は6.0~7.0を目標に、土壌診断を行ってアルカリ資材(炭酸苦土石灰)の投入量を決定し、適正な肥培管理を行う。
- ② 適正EC(1:5)は0.6~1.2(mS/cm)とする。(火山灰土壌は0.6~1.4mS/cm)
- ③ 肥料は緩効性肥料また、有機質肥料を主体に施用する。追肥は化成肥料を主体に施用する。
- ④ 初期・中期の追肥は葉色をみて、必要なら液肥で施用する。
- ⑤ 出蓄期以後は特別(極端な肥料欠乏)な場合以外はほとんど施用しなくてよい。
- ⑥ 水管理：活着促進のためには十分根が張るまで灌水を欠かせない。
- ⑦ 生育途中は根が深いので、灌水はひかえめにする。
- ⑧ 出蓄期以後は特別乾燥がない限り、灌水はしない。

### 4). 育苗

- ① 用土は市販の肥料の入ったものが簡単で省力的である。
- ② 覆土：しない ③ 灌水：低面吸水 ④ 土壌消毒：クロルピクリンか蒸気消毒
- ⑤ 自家製の用土を製造する時は、微細な種子であるから、土塊のない粒子の揃った砂壤土が適する。
- ⑥ 用土の混合割合：砂壤土40%、完熟腐葉土40%、ピートモス10%、パーライト10%の割合で1ヶ月前程度に混合しなじませる。

## 6. シュッコンカスミソウ

ナデシコ科に属し、宿根性のカズメを園芸上シュッコンカスミソウとしている。原産地は地中海沿岸である。

土壤水分過多に弱いので排水良好な土壤でやや乾燥気味の砂壤土・壤土が良い。

深根性であり、生育後半水切りを徹底するので、根を深く伸長させるため堆きゅう肥の施用、深耕の効果は大きい。

土壤の適正pH(H<sub>2</sub>O)は6.0~7.0が適当範囲であり、比較的酸性土壤での栽培は困難である。

生育適温は15~20℃で比較的冷涼な気候を好む。

### 1). 施肥量

(kg/10a)

作 型	定植時期	施肥法	堆きゅう肥	N	P <sub>2</sub> O <sub>5</sub>	K <sub>2</sub> O	備 考(目標収量等)
ハウス (隔離ベッチ)	8月上旬 ~	基肥	3,000	12	18	23	追肥の1回目は定植1ヶ月後、 2回目は2度切りの台刈り後
		追肥	-	5	5	5	
	10月中旬	追肥	-	5	5	5	
		計	3,000	22	28	33	

### 2). 施肥管理上の注意

- ① 適正pH(H<sub>2</sub>O)は6.0~7.0を目標に、土壤診断を行ってアルカリ資材(炭酸苦土石灰)の投入量を決定し、適正な肥培管理を行う。
- ② 適正EC(1:5)は0.4~0.9(mS/cm)とする。(火山灰土壤は0.5~1.0mS/cm)
- ③ ほとんどを基肥として、発蕾時以降に、窒素肥料が残らないように注意する。
- ④ 追肥は初期のうちに液肥で施用する。
- ⑤ 定植前後の水管理(十分灌水し、土壤を落ち着かせる)が重要である。
- ⑥ 据置栽培では、過湿と過剰施肥は腐敗枯死の原因になるので、施肥量は40%程度とする。
- ⑦ 水管理は生育初期はpF2.0程度、開花分化期からやや乾燥気味に推移させる。

## 7. スターチス・シヌアータ

イソマツ科に属し、種子栽培や宿根栽培が行われている。原産地は地中海沿岸。

土壤条件は、排水良好で、通気性があり、有機物に富み、保肥力が大きく、肥沃で地力の高い土壤が適しているため、有機物施用による物理性の改善を行う。

生育は窒素の影響が大きく、過多では栄養生長が盛んになり、軟弱徒長、翼が広くなり、開花が遅れ病害への抵抗力が落ちるので注意する。

土壤の適正pH(H<sub>2</sub>O)は6.0~6.5程度である。

生育期間は比較的乾燥状態を好む。

生育温度は種類で異なるが、ある程度冷涼な気候が適している。

### 1). 施肥量 (スターチス・シヌアータ)

(kg/10a)

作 型	定植時期	施肥法	堆きゅう肥	N	P <sub>2</sub> O <sub>5</sub>	K <sub>2</sub> O	備 考(目標収量等)
夜冷育苗	9月中旬	基肥	3,000	10	10	10	定植後 30日
		追肥	-	1	1	1	
促成栽培		追肥	-	1	1	1	定植後 60日
		計	3,000	12	12	12	

### 2). 施肥管理上の注意

- ① 適正pH(H<sub>2</sub>O)は6.0~6.5を目標に、土壤診断を行ってアルカリ資材(炭酸苦土石灰)の投入量を決定し、適正な肥培管理を行う。
- ② 土壤pHが極端に低くなると硼素欠乏が発生し易いので、ほう砂50g/aの基肥施用し、欠乏症がみられたらほう砂の0.2液(注意点・同量の石灰を中和剤として混合)を応急的に葉面散布

する。

- ③ 適正EC(1:5)は0.4~0.7(mS/cm)とする。(火山灰土壌は0.5~1.0mS/cm)
- ④ 基肥は定植の15~20日前に施用する。
- ⑤ 露地栽培では20%増施し、促成栽培の場合は10~20%減肥する。
- ⑥ 宿根スターチス類については、1年生スターチスより10%程度多めに施用する。

## 8. スイートピー

まめ科のつる性で一年生植物である。原産地はシシリア島である。生育適温は平均15°Cで、生育限界は2°Cである。本圃に定植した後は夜温5~6°C程度を目安とする。

深根性で、直根からの細根量が少ないので、排水良好な有効土層の深い土壌が適している。排水の良い、通気性の良好な、有機物の豊富な土壌が必要である。

生育期間が長く、栄養生長が盛んで養分吸収が多いため、土壌診断を常に行い適正な土壌養分状態を維持するように注意する。

土壌pH(H<sub>2</sub>O)の適当な範囲は、非火山灰土壌は5.0~7.0、腐植質火山灰は6.0~7.0程度。

### 1). 施肥量 (kg/10a)

作型	定植時期	施肥法	堆きゅう肥	N	P <sub>2</sub> O <sub>5</sub>	K <sub>2</sub> O	苦土石灰	熔 燐	備 考
ハウス (沿海地基準品種)	9月中旬	基肥	5,000	10	30	20	80	60	追肥がの回数が非常に多いので有機質肥料や緩効性肥料を十分利用する。
		追肥	—	10	10	10	—	—	
		追肥	—	10	10	10	—	—	
		追肥	—	10	10	10	—	—	
		追肥	—	10	10	10	—	—	
		計	5,000	50	70	60	80	60	

### 2). 施肥管理上の注意

- ① 適正PH(H<sub>2</sub>O)は5.5~7.0目標に、土壌診断を行ってアルカリ資材(炭酸苦土石灰)の投入量を決定し、適正な肥培管理を行う。
- ② 適正EC(1:5)は0.6~1.2(mS/cm)とする。(火山灰土壌は0.7~1.4mS/cm)
- ③ 定植2週間前までに完熟堆きゅう肥・アルカリ資材・燐酸資材・基肥の施用を完了し、耕起・深耕・土壌消毒・灌水を実施する。
- ④ 有機質肥料及び緩効性肥料の利用を心がける。
- ⑤ 硝酸態窒素を好んで吸収するので、硝酸系肥料の使用が有利であるが養分の流亡に注意する。
- ⑥ 品種が多種多様あり、各系統により特性(長日反応、低温要求量等)が異なる、施肥・灌水等に注意が必要である。

## 9. デルフィニウム

キンポウケ科に属し多年草であり、耐寒性はかなり強いが、耐暑性が弱い。原産地はシベリア及び北アメリカである。

土壌条件は、排水が良く、通気性・保水性に富み、肥沃な土壌に適する。

生育適温は10°C~15°C程度が良い。大型の作物ため、有効土層を深く確保する必要がある。

乾燥状態では生育が悪いので土壌水分をある程度必要とする。

窒素・燐酸・加里ともに平均的な吸収量である。

## 1). 施肥量

(kg/10a)

作 型	定植時期	施肥法	堆きゅう肥	N	P <sub>2</sub> O <sub>5</sub>	K <sub>2</sub> O	備 考(目標収量等)
雨よけ	4月上旬	基肥	2,000	15	15	15	追肥は1番花を7~8割収穫した頃に施用し、灌水すると2番花の萌芽が良くなる。
		追肥	—	5	5	5	
		計	2,000	20	20	20	

## 2. 施肥管理上の注意

- ① 適正pH(H<sub>2</sub>O)は6.0~7.0目標に、土壤診断を行ってアルカリ資材(炭酸苦土石灰)の投入量を決定し、適正な肥培管理を行う。
- ② 適正EC(1:5)は0.6~1.0(mS/cm)とする。(火山灰土壌は0.7~1.2mS/cm)
- ③ 全量基肥施用(2~3割は緩効性肥料)でも十分である。
- ④ 花穂が伸長はじめる頃までの新葉や成長点にカルシウム欠乏症が発生しやすいので注意し、欠乏症が出たら塩化カルシウム剤の300~500倍を散布する。
- ⑤ 定植後、発蕾時までは乾燥しないように管理する。発蕾時以降はやや灌水を少な目にする。
- ⑥ 育苗はトルコギキョウに準ずる

## 10. ジンテッポウユリ

ゆり科に属し、カサブユリとテッポウユリの交配種で宿根多年性草である。原産地は沖縄県を含む九州南部諸島である。

土壤条件は肥沃で有機物に富み、排水性の良い、保水性の比較的良い壤土~砂壤土が適している。土壤のpH(H<sub>2</sub>O)は5.5~6.5の範囲が適している。

球根は硝酸態窒素が多いと腐敗、生育異常が発生することが多い。リン酸の吸収量の多い作物である。

生育適温は15~20℃で夏期の比較的冷涼な、日当たりの良い所が適している。

## 1). 施肥量

(kg/10a)

作 型	定植時期	施肥法	堆きゅう肥	N	P <sub>2</sub> O <sub>5</sub>	K <sub>2</sub> O	備 考(目標収量等)
ハウス	4月中旬 ~ 5月中旬	基肥	3,000	15	15	15	テッポウユリはジンテッポウユリの1/3施肥程度。 定植直後の灌水はこまめに灌水する。
		追肥	—	15	15	15	
		計	3,000	30	30	30	

## 2). 施肥管理上の注意

- ① 適正pH(H<sub>2</sub>O)は5.5~6.5を目標に、土壤診断を行ってアルカリ資材(炭酸苦土石灰)の投入量を決定し、適正な肥培管理を行う。
- ② 適正EC(1:5)は0.4~0.8(mS/cm)とする。(火山灰土壌は0.5~1.0mS/cm)
- ③ 熔りんを基肥に40kg/10a程度施用する。
- ④ 堆きゅう肥・アルカリ資材・リン酸資材は1ヶ月前に施用して30cm程度の耕起するとともに、基肥も3~4週間前に施用して土壌と十分混合する。
- ⑤ 肥料過多にならないようにする。生育後半は肥料が切れるくらいが良い。

# 11. 芝

## 1). 施肥量

### (1). 収穫後の施肥

(kg/10a)

収穫後	堆きゅう肥	2,000			
	苦土石灰	100			
	熔りん	20			
芝1割萌芽	総合微量要素肥料(FTE1号等)	40	N : 3.2	P <sub>2</sub> O <sub>5</sub> : 2.0	K <sub>2</sub> O : 2.8
芝3割萌芽	鶏糞(3.0-4.3-2.5)	100	N : 1.5	P <sub>2</sub> O <sub>5</sub> : 2.6	K <sub>2</sub> O : 2.0

### (2). 生育中の施肥

(kg/10a)

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
速効性肥料	-	-	20	20	-	-	20	20・20	20	20	20	-
緩効性肥料	-	-	-	-	20・20	20・20	20	-	-	-	-	-
速効性肥料	燐硝安加里等 S 604(16-10-14)の場合20kgの成分(3.2-2.0-2.8)											
緩効性肥料	燐加安 等 S 222(12-12-12)の場合20kgの成分(2.4-2.4-2.4)											

### (3). 改植・新植の施肥

(kg/10a)

		施 肥					N	P <sub>2</sub> O <sub>5</sub>	K <sub>2</sub> O	CaO	MgO
起耕前	堆きゅう肥	5,000(N1.0-P0.5-K1.0)					30.0	30.0	80.0	50.0	10.0
	炭酸苦土石灰	200 (Ca55-Mg10)					-	-	-	110.0	20.0
	熔りん	100 (P20-Mg15-Ca50)					-	20.0	-	50.0	15.0
	石灰窒素	60 (N20-Ca55)					12.0	-	-	33.0	-
整地前	緩効性肥料	40 (N12.0-P12.0-K12.0)					4.8	4.8	4.8	-	-

## 2). 施肥管理上の注意

芝の施肥量を定めるには、芝が年間に刈り取られる茎葉中に含まれる養分量と、刈り取られない部分に含まれる芝の生育を存続するに必要とする養分の含量を年間の施肥量として補給する。肥料三要素の吸収経過の中では休眠期までの全吸収量の要素間の比率は窒素100に対してリン酸が38、カリウム81である。

吸収量の多い時期は窒素が10月中旬、リン酸・カリウムは9月までであり、とくにカリウムの吸収量が8月中旬～9月中旬に急増する。一般にシバの施肥利用率は窒素が25%～50%、リン酸は10%～30%、カリウムが10～90%である。各要素の施用にあたっては、窒素過剰は過繁茂になりやすく、葉の生長量に比べて根の発達が不良になる。とくに刈り込み後再生不良になり、耐乾性・耐寒性を減少させる。リン酸は生育反応が明瞭でないが、シバ中のリン酸含有濃度が低くなると、春先の生育や耐寒性に影響する。リン酸の秋施用によりシバのリン酸含量と土壤中の可給態リン酸含量を高める必要がある。カリウムの施肥はシバを上手に育て、機械的損傷抵抗性を増し、窒素過多で発生しやすい病害に対する抵抗性にも影響を与える。

## 3). 施肥の基本的な考え方

春肥(4・5・6月)：生育の第一ピークでリナーの伸長を促し、地下部の充実を図り、夏期の高温乾燥に耐える力をつくる。

秋肥(9～10月)：生育の第二ピークで貯蔵養分が増加し、翌春のスタートを早め萌芽力を高める。

## 4). 時期別刈り込み回数の基準

時期	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
回数	1	2	3	3	3	2	1	0	0	0	0	0

## 5). 備 考

- ① 4月新植の圃場は、6月下旬から刈り始める。
- ② 止め刈りは、ヒメクワイシバ・クワイシバは10月中旬～下旬、ノシバは10月上旬～中旬に行う。
- ③ ノシバの刈り込みは、地上部2～3cmとする。